

「絶対的フィナーレ」

作 FOペレイラ宏一朗

物事にはいくつもの決まりごとがあつて、その中でも唯一絶対的なものが、はじまれば終わるということだ。誰もその運命からは逃れることができない。たどり着きたかつたあの場所へ愛をこめて、人生は、エンターテイメント。

女1 スーツを着ている

男1 スーツを着ている

男2 テニスのユニフォームを着ている

男3 半ズボンにタンクトップを着ている

どこかわからない空間。

♪

女1 繰り返します、繰り返します、ここはどこかわからない空間、そうもはや宇宙。否！宇宙ですらない本当にどこかわからない空間である！しかし私はここを地球だと思っている、認識している！いや認識したい！触れる、見れる、聞ける、嗅げる、感じる！しかし明らかに地球のそれとは違う！異空間だ！そんな異空間で私はこの男に、今、プロポーズされた！

男1 どうも男です。好きです、結婚してください！

女1 ありえないわからない気持ち悪い意味不明！なんだこの男は！いったいどこから現れたんだ！私はついさっきまで確かに職場でいつも通りコーヒー片手に顧客データの管理整頓追加作業を行っていたはずなのにどうして今私はこんなわけのわからない空間でこんな男に告白されてるんだ！確かに私は今年で三十八歳、もう結婚しないとやばい年齢だ、っていうか微妙に適齢期を越している！晩婚化がささやかれているこの現代において悠々自適に事務職員として働いていた私には絶対的に出会いが足りてなかった！け・ど・も！こんなわけのわからない男にいきなり告白をされてときめく女子ではない！いいか男！こう見えても私は女子だ！三十八歳の女子だ！そんないきなり出会って告白とかマジ無理なんですけどっていうかここはどこだ！なんなんだいったい！

男1 ここがどんなところだとかどうでもいいじゃないですか。結婚してください！

女1 どこでもいいだつて！いいわけないだろ！私にはゼクシイも顔負けの五年間ぐらいかけて綿密に作り上げた理想の結婚プランがあるのだ！ああそうだよ！そんなことしてるから婚期逃してるんだよ！違う問題はそこじゃない、私はただ、きちんとしたムードでプロポーズされたいんだー！！

女1の絶叫と共に暗転。

明かりがつくと、女1と男1が微妙な距離を取りつつ向かい合っている。

女1 この異空間に来て、男が私にプロポーズしてから、気が遠くなるほどの長い時間が流れた。

男1 結婚してください！

女1 その時間の中でも男はあきらめずに何度も私にプロポーズしてきた。しかし、私はその数の倍の数断った。だが男の耳は飾り物なのかこつちの話を聞く気がない。

男1 結婚してください！

女1 なんなんだいったい、この男は、この空間は。出口がない。かといって何も無い。なのに私は居て、男と二人取り残されている。新しい拷問か、それとも幻覚でも見ているのだろうか。いや違う、現実だ。じゃあなんだ。あんたはいったい誰なんだ！

男1 結婚してください！

女1 今のが五万飛んで百一回目のプロポーズだ。なんなのいったい？

男1 結婚してください！

女1 あのね、その話を聞かないスタンス、ホントありえないからね。無理だよ、私結婚相手にはガンガン愚痴とか聞いてもらいたいタイプの女子だから、そんな態度で来るなら絶対結婚しないから。

男1 結婚してください！

女1 あ、うん、やっぱり聞いてないね。どういうこと？これはイエスって言ったらこの空間から出ることができるとかそういうやつ？

男1 結婚してくれないんですか？

女1 疑問形で来たか。言い方変えてもだめだからね。しないって言ってるから。っていうか疑問形なのは現在の私の状況だからね。

男1 結婚・・・してください！

女1 溜めてもだめだ！あんたはあれか、それしか喋れないタイプの宇宙人か何か。過去にいたよ？二十台半ばのときにデートの度に高いプレゼント毎回買ってきて同じことしか言わなかった男。でもそれ意味ないからね？壊れかけてるからね？壊れかけのレディオだからね？ホントの幸せ教えてよ！

男1 じゃあどうしたら結婚してくれるんですか？これだけ言ってもだめだったとしたら、僕にはもう手がありません。

女1 男はついに普通に喋りだした。おいおい普通に喋れるんかいと大阪生まれ大阪育ちの私はツツコミかけたが今はそんなことはどうでもいい。普通に喋れるなら今までこの男は意志を持って五万飛んで百五回ものプロポーズしてきた異常者ということになるけどそれもどうでもいい。大事なはこのわけがわからない空間において、男が、話が通じる相手である可能性が出てきたことだ。

男1 どうしたら結婚してくれるんですか？

女1 私は悩んだ。ここで「ここを出したら結婚してもいいよ。」と言うことは簡単である。言えばひよっとしたら出ることに成功しそうだ。けれども、もしこの空間を作り出しているのがこの男の能力であった場合、この男はこんな見た目は裏腹にかなりの悪魔的超能力者で、ほぼ確実に結婚しなければいけなくなるからである。

男1 どうしたら結婚してくれるんですか？

女1 ン？あれ？これヤバくない？また同じこと繰り返す系じゃない？私の返事を待たずにまた繰り返しに入るパターンじゃない？

男1 ちよっと、僕の話聞いてるんですか？

女1 おっと、どうやら本当に普通に喋れるみたいだ。私はどこか安心感とも言える感情を持ちつつ素性の知れない男にきちんと話しかけてみることにした。・・・あなたは誰ですか？

男1 僕が誰だか、それほど重要ですか？

女1 重要だよ！、という言葉は心の片隅に置いて。じゃあ、ここがどこだか知ってる？

男1 ここは、どこでもない空間です。

女1 だからそれを聞いてるんだって！

男1 本当にどこでもない空間なんですよ。

女1 じゃあなに、あんたもここがどこだかわかってないってこと？

男1 まあ、そんなところです。

女1 最悪だ。わけのわからない空間に取り残された拳句、頼みの綱の異常者も私とほぼ状況が変わらないのである。っていうかこいつは自分がどんな状況だかもわかってないのにたまたま同じ境遇で困っている私に対して求婚してきているのか。どんな思考回路だ。まったく、親の顔が見てみたい。

男1 親の顔が見たい？結婚してくれるんですか？

女1 え？あ、違う、そういうことではない！

男1 紛らわしいですよ！結婚してください！

女1 だから結婚はしないっつてんでしょうが！なんだ！語尾か！結婚してくださいってのはもはや語尾なのか！

男1 違います！結婚してください！

女1 これではいちごっこである。このどこだかわからない空間で、この男もひよつとしたらわけがわからなくなり、パニック状態で求婚してきているのかもしれない。もしうん、と言ってしまったら私はこの何もない空間で華式を上げることになるのか。どうかこの男の結婚という概念は私の持つるものと本当に同じだろうか？私はまた聞いてみた。あの、結婚って、あの結婚？

男1 はい。結婚、つまり夫婦の関係になるということですが、もちろん法的な婚姻、というかたちのことも指しています。もし仕事などの関係で姓の変更が望めない場合は夫婦別姓を用いてもいいですし、戸籍的に問題があるなら事実婚でも構いません。僕が望むのは、夫婦間の継続的な性的結合を基礎とした社会的経済的結合で、その間に生まれた子が嫡出子として認められる関係としての結婚です。

女1 全然私よりも結婚の知識深かったー！

男1 さあ、結婚してください！

女1 私はただただこの状況が恐ろしかった。もし襲われたとしてもこの何もない空間、誰もいない空間では私は叫んだとしても誰の助けも得ることができず、腕力の差で体の関係を許すことになるだろう。しかしこの男はそれをしない。紳士だとかそんなことじゃない多分。あくまでも結婚という関係を求めているまごうことなき変態なのである。どうしよう、三十八歳独身、ぶっちゃけ揺らいでます。もうよくわからないこの状況、このまま環境のゲシュタルト崩壊に身を落とすよりは、よくわからない変態とそういう関係になったほうがいいんじゃないかと思ってきました。そう、これは高校二年のテニスの試合、府大会での第三試合。

♪

女1 ファイナルセットまでいった挙句のタイブレイクの七回目のデュースのときと同じ状況。もうラケットを上げることすらつらかったあのとき、相手のサーブスをただただ呆然と眺めたあのときと同じ。負けたけど、その次の対戦相手は第一シードの選手だったから負けて全然よかつたって思ったんだ。あれでよかつたんだもん。ひよつとしたら幸せってそういう風に得られるものなのかと思ってきました。ああ、さよなら私のエリートメガネ男子。さよならバリ島の挙式。長い長い押し問答をあきらめ、ゆっくりと謎の男の手を取ろうとしたその時、もう一人の男が現れたのである！

男2 ちょっと待ったー！

♪

男2、どこからともなく現れる。

男2 どうしてそこで結婚しようとするんだ！あきらめるな！

女1 現れたのは私の高校の時に少しいいかも思っていた高身長メガネケメンだった先輩、に少し似た男。なんだこの状況！わけのわからない空間に、私の引きずった青春のような男までが現れた！誰なんだこいつは！この男はまさか、元の世界からやってきて、私を連れ戻しに来た救世主か！

男2 俺と、結婚してください！

女1 こいつも結婚してください宇宙人かー！どうするんだ、なんでこのわけのわからない空間において結婚相手の候補が増えるというミラクルが起きるんだ、そんなミラクル望んでない、っていうかミラクルでもなんでもないただの迷惑だ！候補でもなんでもないわ！いうかなんでテニスの恰好してるんだよ！テニスプレイヤーか！

男2 これはただのコスプレです！結婚してください！

女1 また変態だよ、変態が増えただけだよなんだよこの状況！

男2 いいか、この女性と結婚するのは俺だ！

男1 何を言う、先に結婚を申し込んだのは僕だ！僕と結婚してください！

男2 いや俺と結婚してください！

男1・男2 さあ、どっち！

女1 どっちともしたくないー！・・・あ、ヤバイ泣きそう・・・もうわけわかんない。これはあれかなあ。今年の七夕の短冊に年甲斐もなく「モテたい」って書いたことが原因のかな。だめだったのかな、バチが当たったのかなあ・・・男たちは私の隣で、ずっと私と結婚するのはどっちだ談義をしている。さっきは一瞬魔がさして結婚しそうになったけど、どっちともしたくないよやっぱり。ああ、田舎の年おいたお母さんの顔が浮かんでくる。「真由美、あんたももう若くないんだから、仕事事情で言うてないで、早く旦那さん見つけなさいよ。」うう・・・ごめんなさいお母さん、私がこんな年まで結婚しなかったばかりに、私は今、もはや理解できない状況に陥っています・・・里帰りしたときにこの話信じてくれるかな。いや里帰りできるのかな・・・お母さんのお味噌汁が飲みたいよ・・・お母さん！

男2 あの、ノスタルジーなところ悪いんですけど、結婚してください。

女1 家族を思い泣く私に男たちは遠慮無く結婚を申し込んできた。本当にこの男たちにはデリカシーがない。デリカシーが、というかいろいろない。そもそも誰だこいつは。

男2 俺は錦織系男子です。

女1 まだだよ。また不協和音な感じだよ。つていうか錦織系つてもはや名前じゃないじゃん。なんだその自己紹介は。テニサーか。

こいつはテニサーのヤツなのか。ちゃらいノリの自己紹介決めたりましたぜとかオラついてんのか。テニス部ならまだしもテニサーなんて私は絶対に受け入れられない。

男1 僕と結婚して下さい。

女1 話を聞かないこいつももちろん無理。思えば、そうだった。私がこれまで結婚してこなかったのは、何もベルサイユ宮殿でのプロポーズとか、白馬に乗った向井理を待っていたからとかじゃない、いつもこういう自己抑制能力がなく本能にターボエンジン積んだようなやつばかりが私を口説いて来たからだ。私の身にもなって欲しい。私は女子なの。三十八歳でも女子なの。適齢期を超えたから結婚しよう、いい人がいるから結婚しよう、転勤するから結婚しよう、そんなんじゃないの。結婚は始まりでも終わりでもあって、そこに求めるものは、自分が生まれてきた瞬間よりもずっと確かなもの。絶対的な愛。ははは、今少女漫画の読み過ぎって思ったでしょ・・・間違っていないよ。一条ゆかりと萩尾望都、さくらもここに竹宮恵子。少女漫画は聖書以上のバイブルだった・・・どこで間違えたんだろう。岡田あーみんのせいかな。ははは、ばつきやろ・・・。

女1、男たちを一瞥する。

女1 こんなどこかわからない空間の、だれでもないやつとなんか結婚したくない。この男たちと全く違う、真反対の人間であればだれでもいい。神様・・・うち仏教徒だけど、神様、どうか、私にきちんとした結婚相手を・・・。

♪

女1 するとなんと、この空間に新たな男が現れたのである。

男3、どこからともなく現れる。

女1 そう、男たちとは確かに真反対な新たな男。ほほ山下清が現れたのである。あつはつははははは！私は思わず笑った。もう笑うしかない。両手に花なんて言葉があるけれど、これは抱えきれないほどのドクダミ草だ。あるだろうか、こんなこと。少なくとも三十八年間生きてきて経験したことはない。チョベリバ。死語だつて使っちゃうよまったく。

男3 僕と結婚してほしいんだな。

女1 もう聞こえないふりをしようかな。どう考えてもこの感覚は現実。男たちには触れることもできるし今私は悩むことだつてできている。体の自由もある。なのにこの男たちは私と結婚することしか考えてない。もう、死にたいの一步手前まできてるよ。

男1 僕と結婚してください。

男2 俺と結婚してください。

男3 僕と結婚してほしいんだ。

女1 私は悔やんだ。今まで生きてきた中で、もし結婚しなかったが故にこんな状況に陥っているのならば、もしタイムマシンがあるならば、今すぐ「結婚とか、わかんない。」とか言ってたころの自分をぶん殴りたい。いやリアットをかましたい。ここが私の最終ラウンドなのかしら。あーあ、つまんない人生だったな！

間。

女1 そっか。私、結婚が嫌だったんじゃないんだ。自分がつまんない人生歩んできたつてのを認めるのが嫌だったんだ。まるで結婚が終わりみたいに捉えてて、いつか自分がヒロインになれる瞬間つてのを夢見て、目の前のことから逃げてきたんだ。三十八歳、歳ばかりとつちやつて、大事なことがわかってなかった。これは試練なんだ。神様が！・・・うち仏教徒だけど、神様が私に教えようとしてくれてるんだ！

♪

女1 いいよ。結婚でもなんでもしてやる。それもだれか一人だとかじゃない。あんたたち全員とだ。そりが合わなけりや離婚すればいい。バツなんていくら付こうが関係ない。戸籍上の問題なんてどうでもいい。全部私の人生だ。複数との結婚が認められないならアメリカにでもなんでも行けばいい。子供だって、羊水がなんだとしてもがんばりゃいい。人間にはそういう力があるんだから。その代わり、私の話はちゃんと聞いて。私も自分の気持ちをちゃんと伝えるように努力する。そのためには、まずあなたたちのことを一からきちんと話してほしい。結婚を前提としてさらけ出して。男女なんだから理解しあえないこともあると思うけどそれはお互い、もといみんなで努力しよう。こんな世界だもの、手を取り合っつてどうにかするしかない。ただし、この空間から出られないとしても、なんとか私の親には挨拶すること。なんでかって？私を産んでくれた人に感謝も込めて挨拶するのは常識でしょ。で、結婚式は絶対にバリ島。それだけは譲れない。無理なら、この空間をバリ島風にする。そして、最後に、これはほんとに守って欲しいことなんだけど、私を愛してくれること。うわべだけで結婚してくださいとか言うんじゃないくて、きちんと愛すること。私はこう見えて、三十八歳の女子だから。でも逆に言えばそれだけ守ってくれさえすればいい。こんな空間でプロポーズなんて、ほんと意味わかんないしありえないし気持ち悪いけど、何も変わらない自分のほうがありえないし気持ち悪い。・・・だから、私を幸せにして！私も努力するから！

男たちのダンスに囲まれながら、暗転。

明かりがつくと、現実。

女1、椅子に座って眠っている。

男1 先輩、先輩。

男1、女1を揺すつて起こしている。

女1、起きる。

男1 課長プチ切れますよ。また深夜ドラマ見てたんですか。

女1

男1 大丈夫ですか。

女1

男1 先輩？

女1 わたし、結婚するわ。

男1 は？

暗転。

【上演に関して】

- ※ 上演を希望される場合はその旨を「プロトテアトル」までご連絡ください。
- ※ 台詞の変更・追加・削除などは基本的に自由にしていただいて構いません。
- ※ 稽古場やワークショップでの使用はご連絡不要です。（でもご一報いただけると喜びます…。）

【連絡先】

プロトテアトル

e-mail: prototheater@gmail.com